

た な そ こ じょう あと
棚 底 城 跡

お館に住む棚底城主は、中央の文化人に習って茶の湯をたしなみ
城詰めの侍たちは、海岸から拾い集めた小石で碁を囲んだ



【面取風炉】



【碁石】

2004年

くまもと けん あま くさ ぐん くら たけ まち
熊本県天草郡倉岳町教育委員会

ごあいさつ

今日、全国的に市町村合併が推進されていますが、本町でも、このことが大きな行政施策の一つとなっています。『倉岳町』という行政組織が消え去ろうとする中で、町の歴史を後世に継承することは、今に生きる私たちに課せられた責務であります。そこで、我町では平成13年度から町史編纂事業に取り組んでいるところで、

棚底城跡調査は、その一環として平成14年度から実施してきました。【高城】

あるいは「城頭」と呼ばれる上揚地区の丘陵は、古くから城跡として語り継がれてきましたが、詳細な事は永らく不明でした。近年においても、昭和51年度から3ヶ年、熊本県教育委員会が実施した「中世城跡悉皆調査」により、わずかな遺構が確認されただけで、今日まで竹や雑木に埋もれていました。それでも、中世文書の『八代日記』には、棚底城を巡って、天草五人衆の上津浦氏と栖本氏による「棚底城争奪戦」の顛末が幾度となく記されているだけに、専門家の間では本格的な調査が待たれていたところでした。

調査にあたり、当初は、鋼張り確認のための地形測量を目的としましたが、調査が進むにつれて、県内最大級の「海城」である事が判明し、急速、発掘調査も実施する事になりました。これまでの成果の一部は、本報告書で述べているとおりです。特に全国的にも珍しい茶の湯道具の「石製風炉」が出土するに及んでは、戦慄さえ覚えました。

最後になりましたが、本調査に際し、御指導を賜った熊本県立鞠智城・温故創生館の大田幸博館長、文化庁記念物課の磯村幸男主任調査官・伊藤正義調査官、熊本県文化課、地権者の方々、(株)くらたけ、(有)大迫工業、(有)中村建設工業の各位に厚く御礼を申し上げます。

本調査が、倉岳町発展の礎の一つとして、また、今後の中世城跡研究の一助となるよう祈念します。今後、町ではこれまでの調査を基に、貴重な城跡の保存・整備に向けて英知を結集していく所存です。関係各位のさらなる御指導を賜れば幸いです。

平成16年7月31日

熊本県天草郡
倉岳町長 稲津俊徳



【調査組織】

調査主体

熊本県天草郡倉岳町教育委員会

蓮田陽之介（倉岳町教育長） 森田敏朗（教育課長）

調査担当者

藏川喜三生（文化財係長） 森田洋介（日本考古学協会員）

専門調査員

今村克彦（熊本城整備復元専門員）

大田幸博（熊本県物智城・温故創生館長）

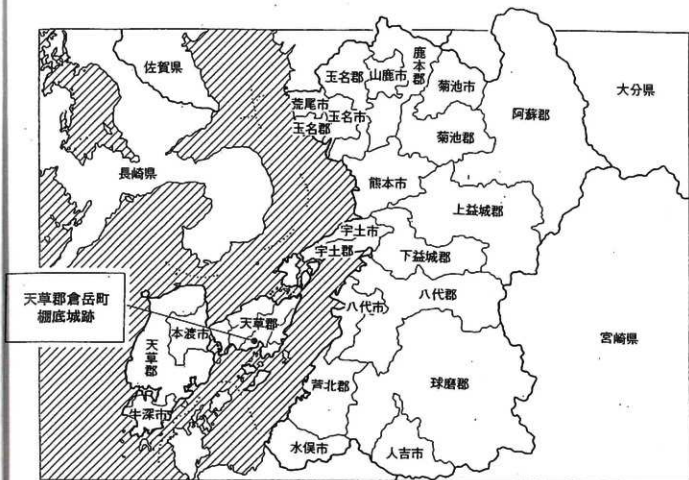
東坂和弘・西島真理子（文化財建造物保存技術協会）

阿蘇品保夫（元 八代市立博物館長）

大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館・副館長）

資料整理

石工み砂き・溝口真由美（人吉・遺跡調査事務所）



熊本県天草郡倉岳町位置図



櫛底城跡 航空写真 (南東→北西)

棚底城跡の概要

発掘調査は、倉岳町が町史編纂事業の中で取り組んでいます。平成14年度から開始して今年度で3年目になりますが、一環して、政府の緊急雇用対策事業に乗ったものです。

城跡は、天草の上島(かみし)の南側海岸線に位置します。棚底(たてこ)地区の山付きにあって、城跡からは、遠く海の方へ水尻(みづし)・芦北(あしきた)地方の山も望めます。県内最大級の海城(うみしろ)で、北側背後の倉岳(たぐら)標高682.2m)末端の一尾根に築かれています。緩傾斜をなす瘦せ馬状の尾根に、計八箇所(I~Ⅷ)の郭(こつ)が造り出され、各段の法面には、野面積み(のりか)の石塁を見ます。破城(やぶしろ)によって上位が壊されていますが、これらは、土留めを兼ねた「張り子の虎」的なものと考えられます。低い石垣ですが、敵勢には、かなりの威圧感を与えたものと思われまます。

地形の括れ部となる西側の敵部には、3条の堀切が並列します。内側は、特に大規模造りで、I郭の直下であり、北端部は東側へ回り込んで空堀(くわど)となっています。縁に残る土塁は大半が削り取られて、残っていますが、これは、破城の際に空堀の埋め土として、利用されたからでしょう。破城の度合いは、かなり強かつたようです。

発掘調査によって、程度の差こそあれ、全部の郭から岩盤を掘り込む数多くの柱穴が検出されました。驚くべき調査結果で、県内においては、類例を見ない出来事でした。その中でも、I郭から検出された独立柱建物跡は、柱穴の並びと広がりから「お館(おのり)」的なものと見なされます。同時に、南下の小段(こくだ)からは、これに併設された「舞台」と思われる5条の杭列跡も発見されました。I郭からの海の眺めは、絶景です。城主はこの景色をお庭として景賞し、舞台では能などを舞って来客をもてなしたのでしょう。中世城の建物を推定する上で、画期的な発見でした。柱穴の側壁には、力強い鑿(う)跡がくっきりと残っていました。中には、縦位に刻まれた粗い鑿跡を消すために、横位に廻らしたものもありました。こうすると滑らかな壁面になりますが、柱穴の掘り込みに芸術性は求められません。不思議な作業で、理解に苦しみます。職人のこだわりによるものでしょうか。一方で、皿状の掘り込みもありました。これは、岩質が硬い箇所に通達したため、途中で放置されたものと思われまます。全体的に見て、柱穴の造りは、I郭よりもII郭の方が良好で、明らかに技術が進歩しています。学習効果のためのもので、I郭からII郭の順に工事が進んだ事も意味します。

これまでに、多量の輸入陶磁器が出土しました。当時、盛んに海外貿易が行われた証で、四方を海に囲まれた天草の土地柄を表しています。さらに、茶の湯に用いられた石製「風炉(ふうろ)」や、海岸から拾い集めた簡易な碁石も見つかりました。風炉や碁石からは、平時における城の生活を伺い知れる事が出来ます。城は、戦(いくさ)の副産物であるだけに、貴重な出土遺物です。お館に住む城主は、茶の湯を嗜み、城詰めの兵士は、碁盤を囲んだ事が分かります。

中世文書の『八代(やしろ)日記』によれば、城は、天草五人衆の上津浦(うづうら)氏と榎本(えのもと)氏の争いの場となり、天文13年(1544)に3回、弘治2年(1556)に2回、永禄元年(1558)に1回、同3年(1560)に1回、同9年(1566)に1回の襲り合いがありました。



棚底城跡位置圖

八代日記における棚底に関する事項

天文十三年甲辰（一五五四）

二月二日 上津浦親頼中、**棚底**下城、
四日 上津浦親頼中、上津浦下城、
六日 （上津浦）種敏上津浦下城、

弘治二年壬（丙）辰（一五五六）

四月中九日 天軍一揆中ニ光勝寺使傳候、五月九日ニ歸候、豊州

六月一日 戊子 上津浦ヨリ**棚底**之内、藤川拵候、

十一月

十七日 上津浦ヨリ**棚底**をかたぬき破候而、打取五人、生取
十三人、牛馬舟疋、

永祿元年戊午歲（一五五八）

三月十六日 上津浦ヨリ**棚底**二動、崎子ヨリ下津浦二動候、

永祿三度申歲（一五六〇）

閏閏廿六日 自 上津浦ヨリ年頭ノ書書、

閏閏廿六日 大 自 上津浦ヨリ**棚底**二動、酒本衆三人打候、今日敵、

四月四日 二 桑原平三 方高津瀬まで拔越候、夫ヨリ天軍のことく又退
出、

十一月二日 甲子 日 東左京亮方、天軍殿ニ為合力行候、十二月六

日 二 船陣、有馬衆如上津浦開陣、

閏閏十九日 辛巳 日 **棚底**之聲、自酒本ヨリ上津浦へ被運候、廿日 二

日 有馬部勢如日 **棚底**、

閏閏廿五日 上津浦ヨリ延命候を以八代奉行まで被仰候、御真見を

十二日 二 船陣、御真見、後御船疋、天軍斗運之條歎

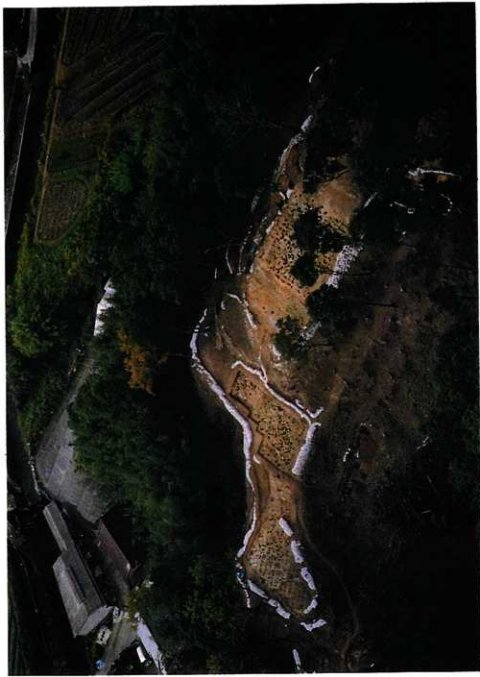
永祿九内寅年（一五六六）

二月二日 山字ノ字、行重ト真脇方の間事ナリ、美作上津浦ニ此

閏閏四月六日 山 中 上津浦ヨリ船住させられ候て、宇土ニテ成敗、

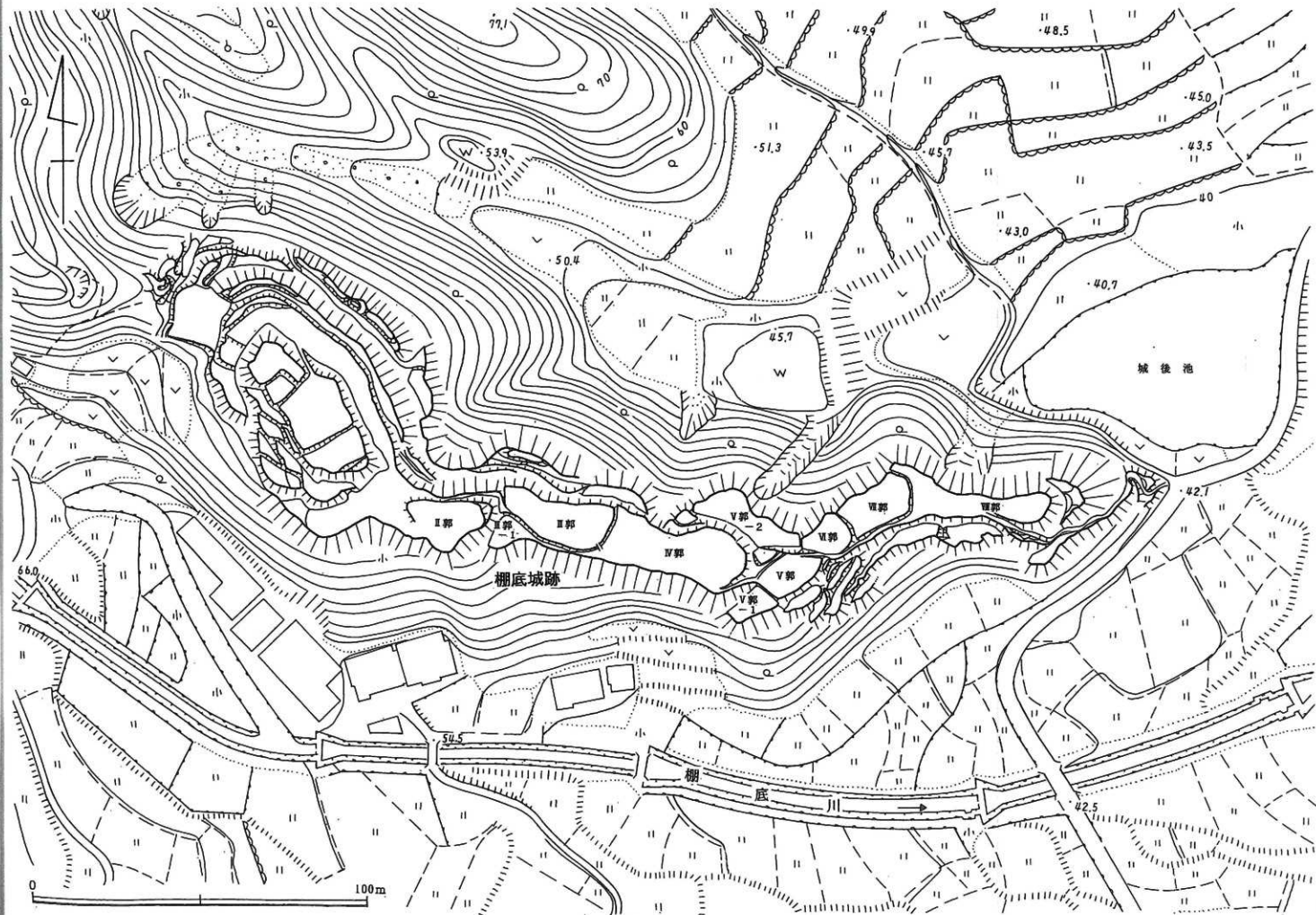
同日 夜、上津浦ヨリ八代奉行ニ書信ヲ、あふ二百舟本おい落候、

十五日 上津浦ヨリ八代奉行ニ書信ヲ、あふ二百舟本おい落候、

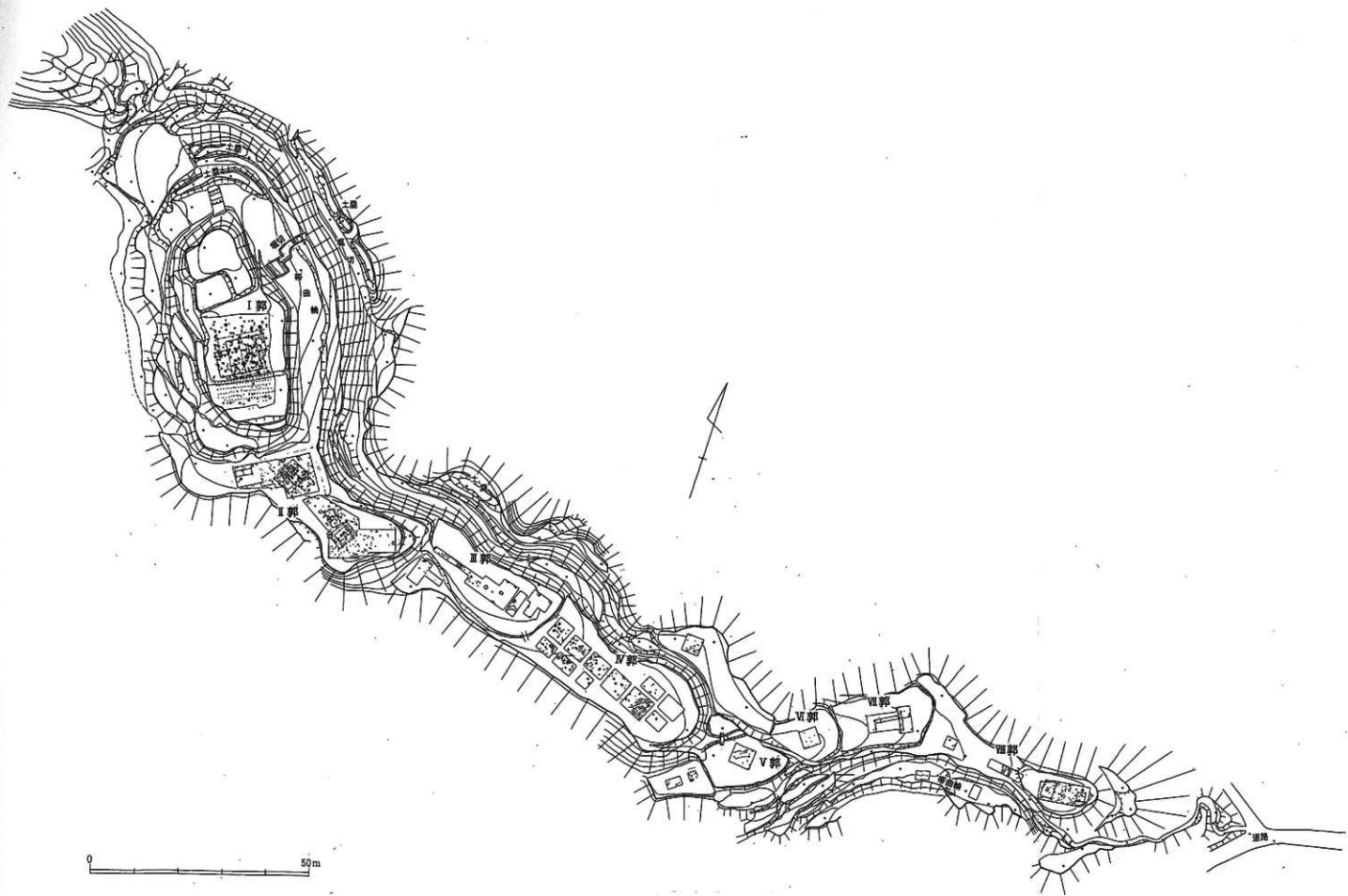


柳成嶺跡 航空写真 I 部・II 部 (北東→南西)

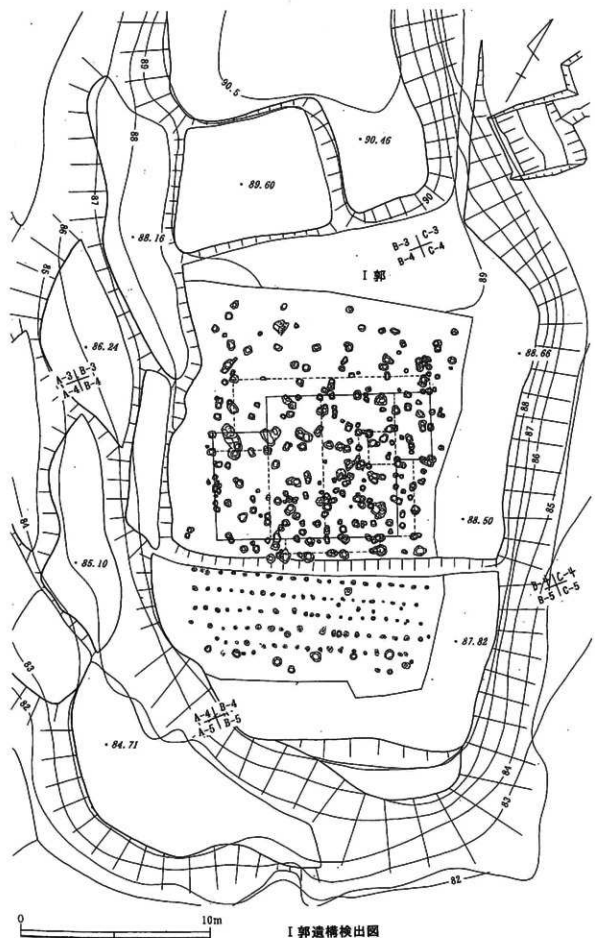




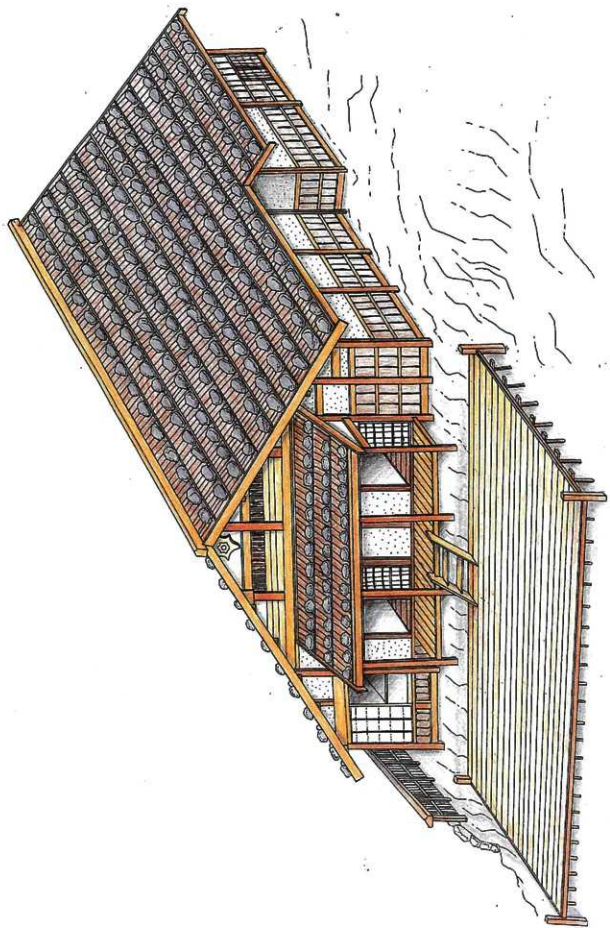
棚底城跡周辺地形図

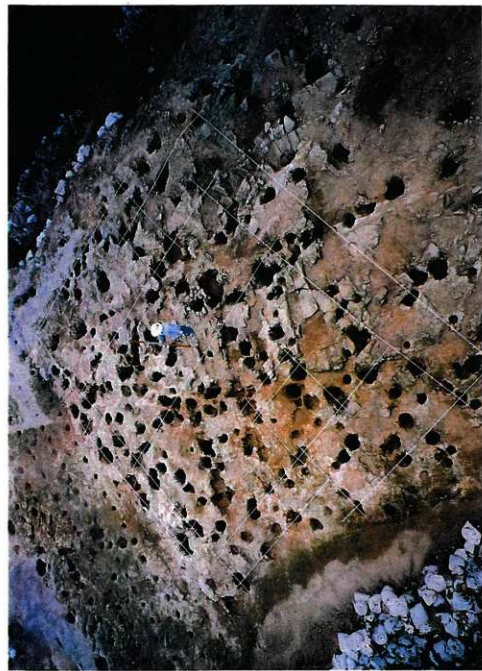


柳底城跡全体图



I 郭遺構検出図



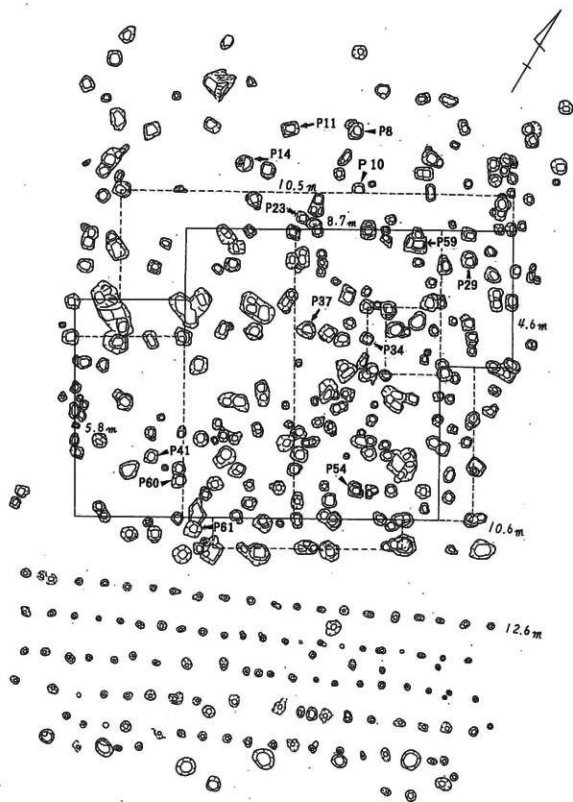


I 期住居出露物跡 概略 (北→南)



1 號採出磁物 磁石之類





I 郭検出建物跡 館跡

(P 番号は次頁の柱穴写真と対応する)



I-P8 (底部に根石)



I-P23 (底部に根石)



I-P11



I-P59



I-P14

I 郭 柱穴検出状況



I-P29



に根石)



I-P37



(底部に根石)

I-P60



I-P34



I-P61

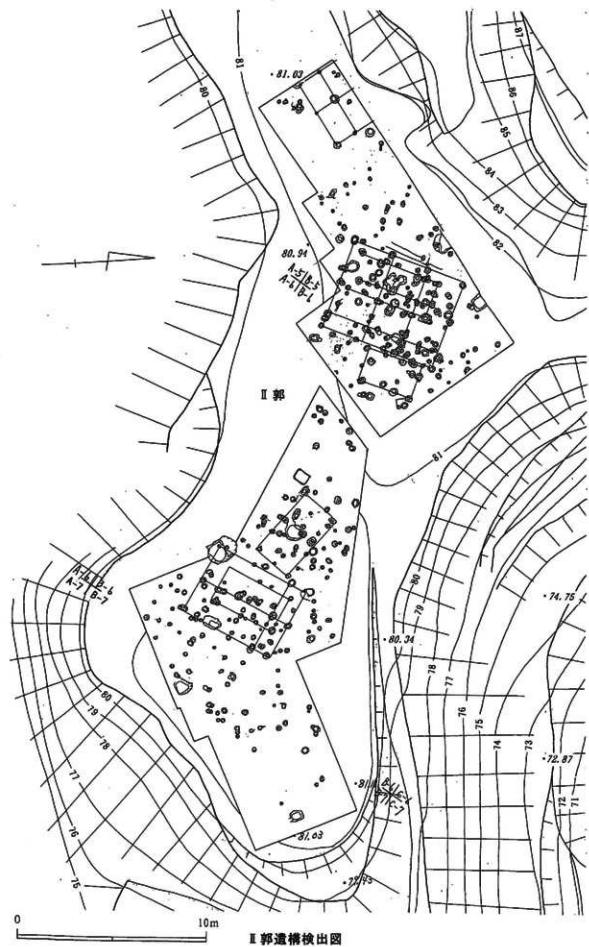


I-P41

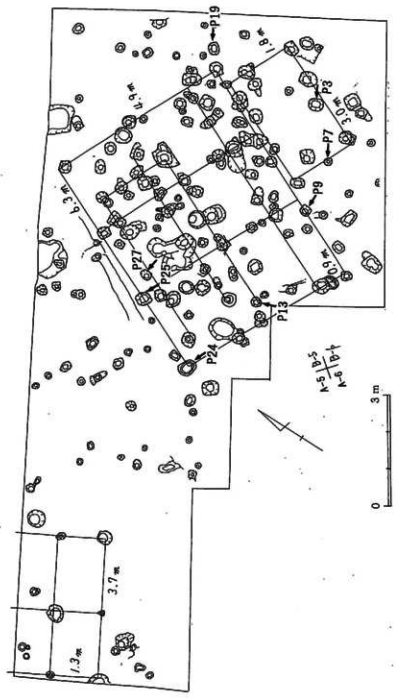


I-P54

I郭 柱穴検出状況



I 郭遺構検出図



I 柳西側トレンチ検出建物跡
 (P番号は草書の柱穴写真と対応する)



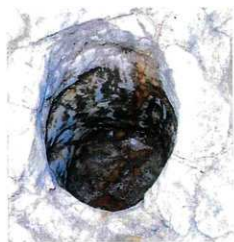
I-P3



I-P7



I-P9



I-P13

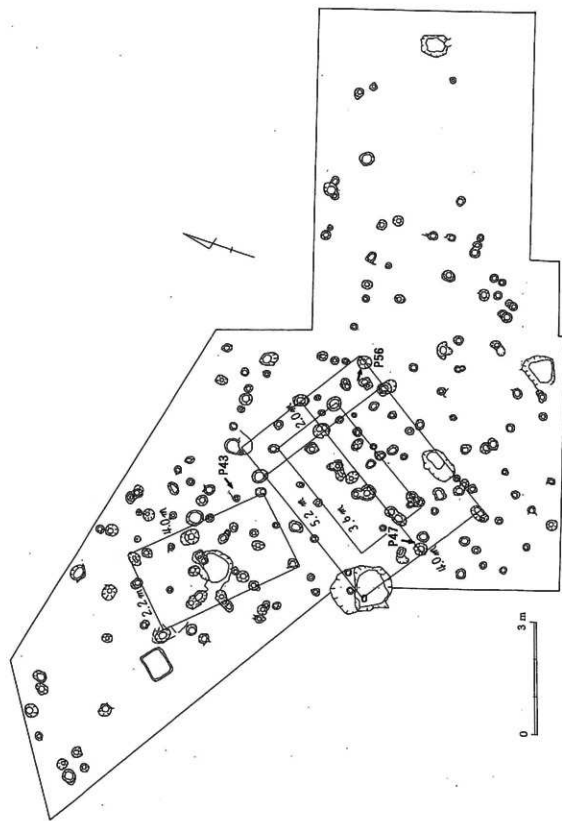


I-P19

II 郭 柱穴検出状況



I-P24



II 新東園トレン子検出地跡群 (P 番号は次頁の柱穴写真と対応する)



I-P25



I-P27



I-P43



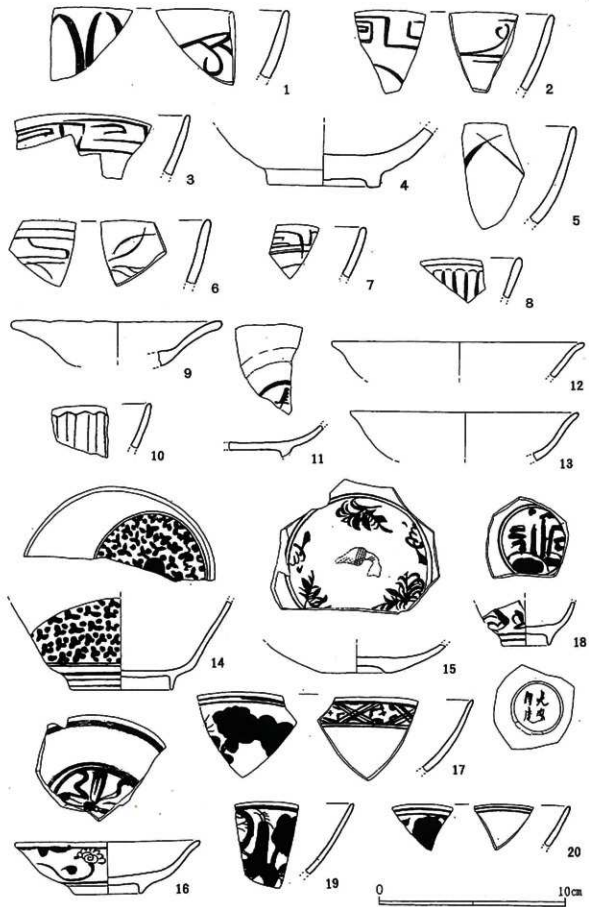
I-P47



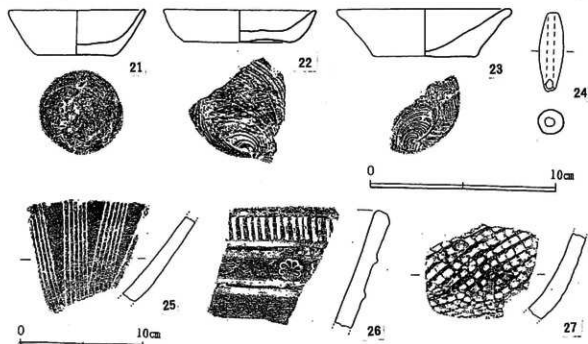
I-P56

II 部 柱穴検出状況

出土遺物



棚底城跡 I 郭出土遺物実測図①



棚底城跡Ⅰ郭出土遺物実測図②

全て、Ⅰ郭から出土した遺物です。この中で、3・14・17は柱穴から出土しました。青磁・白磁・染付けは、いずれも中国から輸入されたものです。

①青磁(1~11)

11が景徳鎮窯、他は、全て竜泉窯で生産されました。1~6は、14世紀後半から15世紀中葉、7は15世紀代、8~10は、15世紀から16世紀前半、11は、16世紀中葉から末のものです。1には、内外器面にヘラ描きの蓮弁文様、5は、外器面に同文様が見られます。2・3・6・7の外器面には、口縁部に雷文様が描かれ、2・6の内器面には、ヘラ描き文様も加えられています。8・10の外器面には刻先蓮弁文様、9の内器面には柳指文様、11の高台内には銘の一部の「年」がみられます。

②白磁(12・13)

いずれも景徳鎮窯で、12は16世紀代、13は16世紀から17世紀初頭のもので。復元口径は、12が13.5cm、13が12.2cmを計ります。

③染付け(14~20)

いずれも景徳鎮窯で、14は15世紀末から16世紀前半、15は15世紀末から16世紀中葉、16は16世紀前半から中葉、17・18は16世紀後半、19・20は16世紀後半から17世紀初頭のもので。呉須による文様は、14の外器面と内底面に小花群、15は内底面に貼り付けの魚、16は外器面に花唐草、内底面に十字花、17・19・20の外器面に花草、さらに17の内器面には四方棒が見られます。18には、高台内に「大明年造」銘、内底面に蓬来山文様があります。16は端反形の皿で、復元口径9.8cm、復元底径3.6cm、器高2.8cmを計ります。



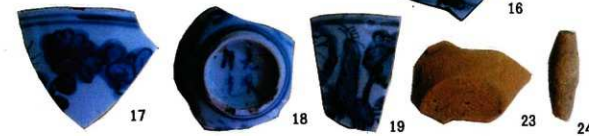
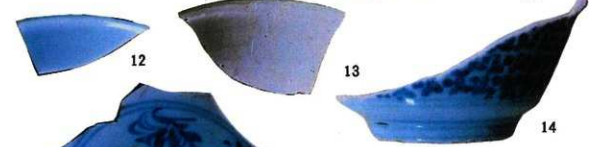
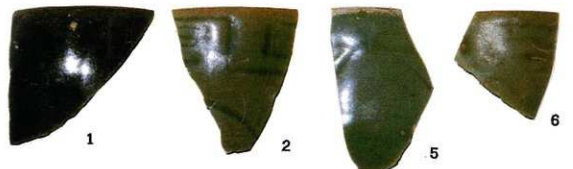
24



10mm



27



青磁

5世紀中葉
です。1に
8・7の
られていま
名の一部の

口径は、

葉、16は16
のです。具
外器面に花
が見られま
形の皿で、

I 郭出土遺物

風炉について

「風炉」は、茶の湯の席上で、茶釜の湯を沸かす道具です。「面取」は、焚口(焚口)が方形に挟(は)り取られている事を意味します。他方、焚口に横穴を穿(う)った造りは「朝鮮風炉」と呼ばれています。

内部には、灰を敷き、炭火を用いました。胴部に比べて、口縁部が括(ひ)ついていますから、羽釜(茶釜)を乗せるやり方だった事が分かります(対して、幅広い口縁部のものは、内部に支えとなる「ごとく」を入れました)。

堀底城跡の「面取風炉」は、砂岩礫を加工した石製品で、全体の二分の一程度が出土しました。復元口径24.5cm・復元胴径44.7cm・器高27cmを計ります。推定される焚口幅は、約16cm。器厚は、10.8~13.5cm。

堀底城主が、中央の文化人に習って、地元の石工に製作させたのでしょう。推定される重さは約50kg、外器面は、五輪塔の水輪を思わせる様な、丁寧な仕上がりになっています。同時に、天目茶碗片や茶臼などの茶道具も出土しました。



面取風炉(出土品)



〔複製品〕

